

幼児が絵を描いている時 (一)

ある四歳女兒のなぐり描き

青 木 隆

子どもが絵を描いているのを見ることは楽しい。連続的に小さな出来事が次々に現われ、しかもそれなりの前後の脈絡もあり、雑多な要因がからみあつて一つの絵としてでき上がつて行く。これから述べることは幼児の描画過程の観察記録を中心とするものであるが、これらの事例をおして、幼児画を考へて見たいと思う。

1

初めにとりあげる例は、現在四歳二ヵ月になるダウン症の女兒のものである。いまかりにY子としておく。Y子ちゃんは小さくて身長も体重もとても四歳児には見えないが、いたつて元氣である。そして湘南地方のC市が主催する障害をもつ子どものための「生活訓練会」に毎週三回かよつてゐる。三歳になる

とすぐ訓練会に入ったのもう一年以上たったことになる。訓練会での最近のY子の生活ぶりを簡単に紹介しておく……排せつもあまり失敗しなくなつたし、食事もゆっくりだが一人で食べられる。衣服の着脱はほんのわずかの介助を必要とする程度である。またよく動き回り、特に音楽が聞こえて来ると体をリズムカルに動かして喜ぶ。ぬいぐるみをだっこしたり、砂遊びをしたりで一人きりでけっこう楽しそうである。言語はほとんどないといつてよいが、こちらからの言語はかなり理解しているし、名前を呼ばれるとふりむいて返事をする時もあるという。ただ気になる点は体があまりにも小さく体力がないことであらう。

Y子が三歳九ヵ月のある日のことである。この日訓練会に集まつた子どもは九名、大人四名の計十三名が福祉会館のプレ

ルームに入っていた。広い部屋の床にはB2ぐらいの大きさの紙が何枚もひろげられ、各自好きな所に勝手な方向をむいて筆で絵を描いていた。Y子はなんとなく集団の中心とおぼしきところから離れて陣取って足をなげ出してすわっていた。彼女は左ききである。

次にその時の十五分間ほどの行動記録をぬき書きしてみる。だからだと冗漫であるが、できるだけ手を加えないことにした。(一)内は補足的な説明か私の主観をまじえた臆測などである。

「緑色の絵の具のついた筆をゆっくりひっぱりつばるようにして線を描く。この動作をしばらくくりかえす。筆がかすれてくる。立ち上がる。約二メートルはなれた緑色の絵の具の入ったコップの所に、まっすぐあるいて行き筆に絵の具をつける。自分の描きかけの絵の所にもどって来る。帰って来ると隣にいた男子の位置が変わっている。男子の背中が邪魔でさつきと同じ場所にはすわれない。しばらくうろうろする。三メートルばかり離れたところに何も描いてない新しい紙があることに気付く。その前に立って白い紙を見ている。(とりあげようと描こうともしない)ふりかえって自分の描きかけの絵の方を見る。さつきの男子の位置がまた変わって、Y子のすわっていた場所があいていることを見る。もとの所に帰っていきいすわる。

絵の上におしりをのせてしまう。先生がY子をだきあげて衣服に絵の具がついていないかを調べる。Y子を下におく。おかれのままの姿勢で絵を描き出す。」

「立って筆に絵の具をつけに行く。緑色のコップから筆を出して筆先をジッと見る。コップのそばには紺色のセーターを着た男子の背中がある。Y子はそのセーターに筆をこすりつける。そして筆をおしあてたあたりをのぞき込んで見る。(目が近いので顔を近づける。紺の上に線を描いたためか私にもよく見えない)今度は筆の穂先を二本の指ではさんで見る。指の先が緑になる。もとの位置にもどって絵を描く。」

「先生が青い絵の具の入ったコップを持って来てY子のそばに置く。中腰にしゃがんでいたが、足をなげ出して腰を落付けける。緑色の付いた筆を青の中に入れる。一筆ごとに絵の具をつけては線を描き、描いては絵の具をつける。しばらくはこの動作が続くが、絵の具をつける間隔がだんだんのびて行く。(つまり一回に描く描線の長さが長くなる)この絵の具はさつきの緑色より濃く溶いてある。(なんとなくようすが違うように感じたのかもしれない)筆の穂先を指でつまんでみる。指をジッと見て、自分の衣服に指をこする。筆の動きがだんだんおそくなる。同じところを何度も描く。画面はぬりつぶされて行く。

（新しく描いた線がどれなのか、そばで見ている私にも判別しにくい）再び筆の先をつまむ。筆の動きはますますおそくなる。筆はかすれてくるが、ゆっくり動かすだけで、絵の具をつけようとはしない。急に立ち上がる。（すぐそばにベタベタした絵の具の入っているコップがあるのに……）さっきの緑色の入ったコップのところへ行く。帰って来る。余白の部分に大きく手を動かす、はやい線を描く。連続的な左右の往復運動になり、やがて連続的に描点をうつ。ゆっくりしているが、リズムは安定している。」

「Y子は手を休め、いま描いている紙を持ち上げて見る。その下にもう一枚新しい紙があることに気付く。もとにもどしほとんど余白のなくなった紙に描き続ける。……筆がかすれて来る。上の紙を持ち上げて下の新しい紙に筆をこすりつける。わずかに色がつく。もとにもどして描いてみる。ほとんど描けない。筆の先を指でつまむ。指に色がつかない。」

このあとすぐにこの日の描画は終わる。先生が「Yちゃんおしまいにしましょうネ」というと立ち上がり、先生に筆を渡した。

この記録をとおして感じられることは、Y子が一人きりで落付いて絵を描き、いろいろと試みていることである。描きにく

くなった筆の先をさわって見たり、ベタベタの絵の具が気に入らなければ、離れた所まであるいても絵の具をつけに行く。「おやっ？」と思ったり、「おかしいぞ」と感じると確かめている。このような態度は大変いいことだと思った。しかしこの例にもあるとおり他の子が邪魔だと思ってもどけようとしたりしない。とりわけ他の人をさけるようすもないが、さりとして働かかけもない。まだまだ一緒に遊べるまでには長い時間がかかりそうである。

2

それから五ヵ月ほどたつてY子は四歳二ヵ月となる。あいかわらず一人ではよく遊ぶ。先生たちにはあまったれるようになったが、一緒に遊ぶといえるような状態ではない。

そんなある日の午後であった。プレールームには、児童八名、市の専任の職員二名、ボランティア二名、それに私。各自適当にちらばって遊んでいる。先生がY子のすわっている床に画用紙と二十色のクレヨンを置く。

「すぐにクレヨンのふたをあげ、ふたを両手で持って頭の上に高くかざす。クレヨンの箱が画用紙の上に乗っているので、ずらして紙の左側におく。みどり色をとりあげる。」

このようにして描き始める訳だが、これから二十分ほどの間に、Y子は結局十六枚の絵を描くことになる。作品のおもなものは写真で示したので参照されたい。一見したところでは、すべてがいわゆるなぐり描きであって、変化に富むものとはいにくい。しかし実際の描画場面を観察していると、確かめて見たり、ためらったり、はつきりと画面に現われない心の動きがみられた。私はY子のそばにつきつきりであったが、ほとんど口をきかなかった。たしかに私はこの訓練会に何度か顔を出してはいるが、Y子と一対一でそばにつきそったのは、これが初めてである。したがってラポートがついている訳ではない。それでも私はY子に無視されたり、背中を向けられたりはしなかった。

「一枚目が一段落してY子の手が画面から離れた時に、私は絵を描いた紙を新しい紙にとりかえた。一瞬なにもせず新しい紙を見ている。(描いてある絵をおさえて私に渡すまいとするような行為は全くみられなかった)緑のクレヨンを箱にしまい、赤を持ち二枚目を描く。」

二枚目を描き三枚目となる。

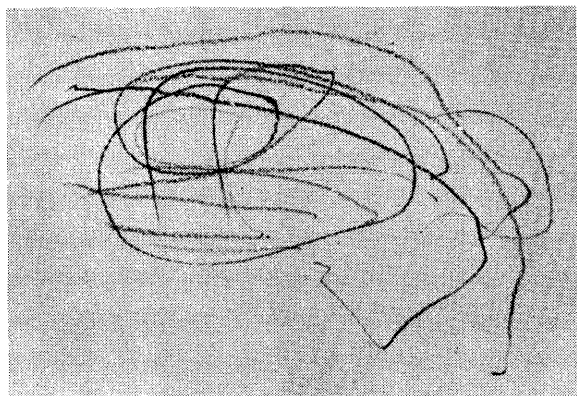
「またクレヨンをとりかえて水色を持つ。クレヨンの先を見る。(水色はかなりの長さだが、先はすりへっていて紙に包ま

れている。紙をやぶいて先端を出すようなことはしない)水色を箱にもどし再び赤で描く。描き始めるとフォォと声を出す。一段落すると私の顔を見る。視線が合うが私もしなないでいると、Y子は三枚目の画用紙をもち上げて私を見る。(まるで、終わったよ、紙をかえてちょうだい……というような感じである。二枚目、三枚目までは私ができ上がった絵をとりあげ次の紙をY子が描きやすい位置においてあげていた。三枚目の時初めてY子の方から絵を私に渡そうとした)私は四枚目の紙を持って彼女の前に差し出した。受け取って自分の前に置く。」

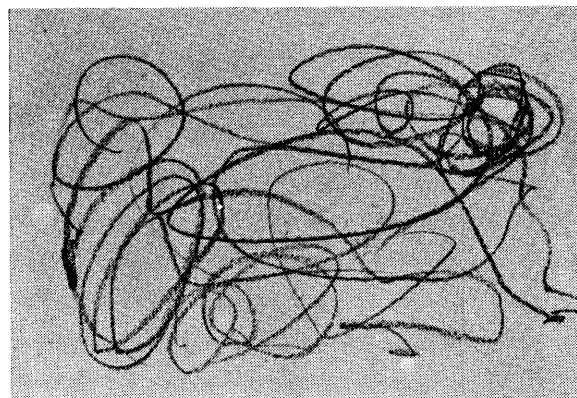
「四枚目、先の出していない水色のクレヨンを再びとりあげて見ていたが、そのまま箱におさめる。私がクレヨンの先の紙をむいて箱にもどす。Y子は私のことを見ている。すぐ水色のクレヨンを箱から出し、先端が出ている方を下にして持つ。きれいに描ける。手を大きく動かししたので、画用紙が動く。右手で紙のすみをおさえて描く。」

このようにして五枚、六枚と描き進む。七枚目の時、途中で手をとめ顔を上げ私を見る。視線が合うと笑う。そしてまた描き続ける。(描画中ばかりでなく、Y子はよく手もとを見ている)六枚目八枚目は茶色のクレヨンを使っていたが、角度によつてはクレヨンを包んでいる紙がひっかかり、かすれたりする。

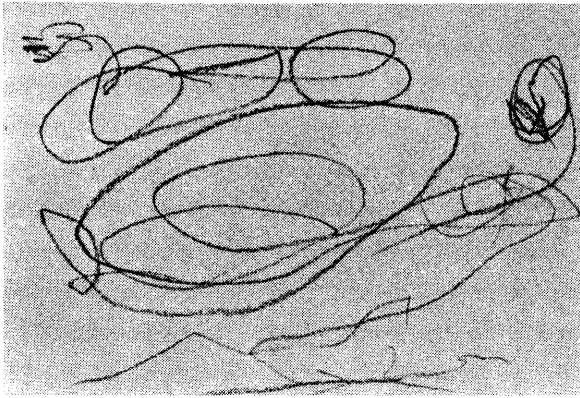
Y子（C・A 4:2）の作品、16描中8枚、なぐり描きとしてはやや進んだ段階にあり、独立したマルや十字形が画面に現われるのも、それほど遠い将来ではなさそうである。（1歳後半から2歳前後の発達段階か）



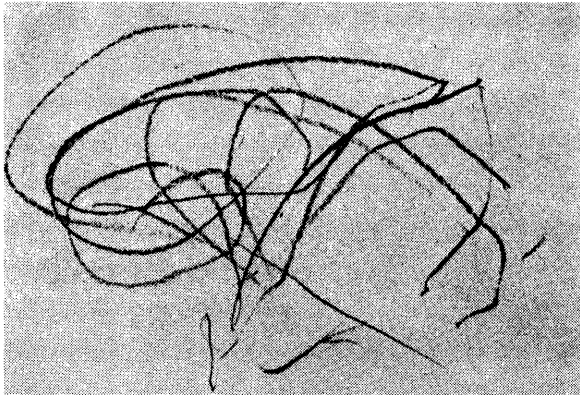
1
枚目（緑色）



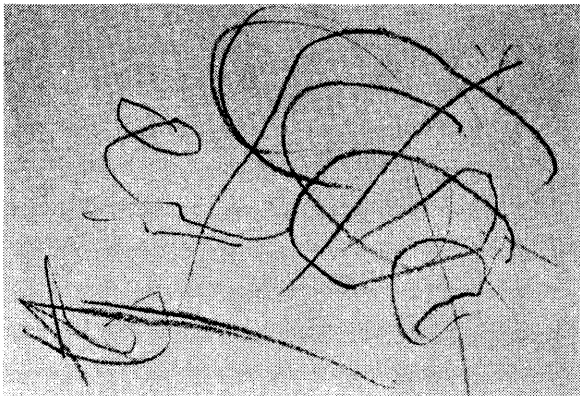
3
枚目（赤）余白をさがして描く



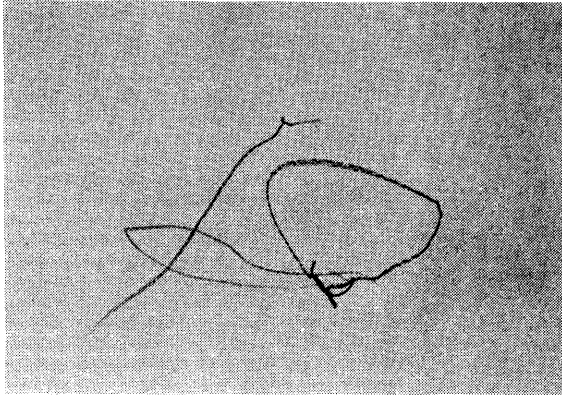
5枚目(赤)



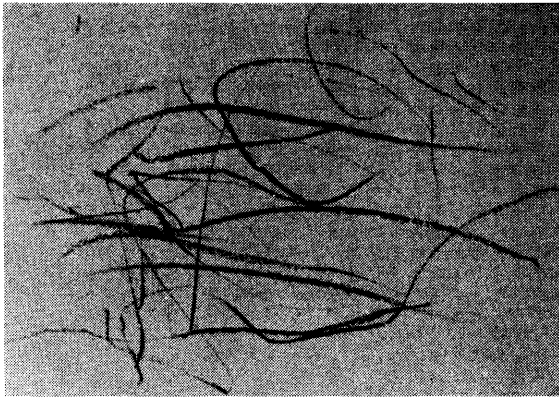
8枚目(茶)クレヨンの先の紙が時々ひっかかってかすれる



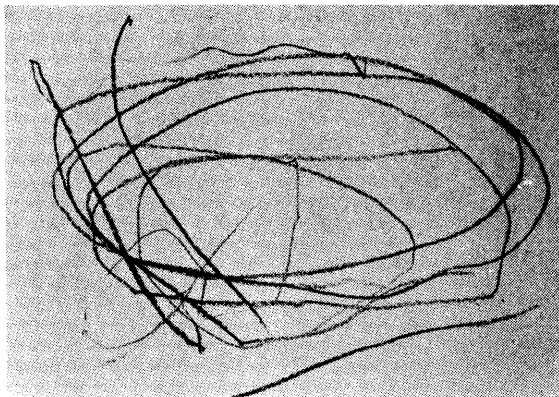
12枚目(茶) 8枚目と同様



14枚目 (茶) 少しかいてすぐ紙をかえる



15枚目 (茶) 途中で描けなくなる紙をむいてあげると強い描線となる



16枚目 (茶) のびのびしているが内容は単純になっている

筆圧が強くなる。描きながら声を出すことが多くなる。九枚、十枚はほとんど声を出して描く。十枚目になるとウーツウーツと二段階に区別出来るような声を出す。最初のウーツはやや弱くゆっくりと長い。後のウーツは大きく力のこもった声である。この声と同様描線にも変化がでる。前半はゆったりとのびがあり、後半になるとスピードが加わってはねるようになる。細くなって消えて行く。声と手の動きは全くシンクロナイズしている。いかにも楽しそうである。

十二枚目の時に男の子がそばにやって来て、絵をのぞく。Y子は手を休め、のけぞるようにして男の子から離れる。男の子が遠ざかって行くまで目で追う。

十四枚目から十六枚目まではすべて茶色で描いた。茶色は先があまり良く出ていないのに、すでに六、八、十二と三枚も使っている。十五枚目にもかすれて描きにくくなる。クレヨンの先を目に近づけて見ていた。

「私の顔を見る、次にクレヨンの先端を一本の指で軽くチョンチョンとたたたく、そして私の顔を見る。私がかまって手を差し出すと、手のひらにクレヨンをのせる。先端の紙をむいて渡す。すぐ描き続ける。」

十二、十三枚目あたりから、あきてきたとは思われないが一

枚描きおわる時間が短かくなった。新しい紙に交えてもらうことに興味を示したのかもしれない。私が紙を渡す時には声を出して笑うようになった。十一枚目からは、彼女が自分で自由に紙がとりかえられるように、手のとどく所に新しい紙を十枚ばかり重ねておいた。描きおわった紙を私に手わたしするが、とうとう最後まで自分で勝手に新しい紙を取りはしなかった。でき上がった絵をわたしてしまい、手もちぶさたになっても私の顔をニコニコしながら見ているだけであった。私の手が新しい画用紙を持ち上げると、すぐ手をのばして取って行った。

十七枚目も一応受け取ったのだが、描き始めないうちにレコードの音楽が聞こえて来た。Y子はどうしようか迷っていた。足や靴をいじったりモジモジしていたが、スッと立ち上がって皆のいる方に行行った。

この二十分間でY子は今までと違った経験をしたのかも知れない。彼女にしてみればあまりよく知らないおじさんがずつとそばにいた訳である。それでも次々に紙をとりかえてくれたり、描きにくいクレヨンをなおしてくれたり……

どう考えてみても彼女が積極的に私に働きかけて来たとはいえないが、なにかしらお互いの心の通じ合う瞬間もあった。視線が合つとともにニコニコ笑ったり、ともかく私との関係は少

しずつよい方向に向かっていたといえよう。私の顔を時々見ながら声をたてのびのびした線を引っぱっている彼女は楽しそうだった。少なくとも一人きりでポツンと絵を描いている時とは違った楽しさを味わってくれたのではなからうか。

3

順序は逆になるが、この十六枚の絵を描いた二週間ほど前のことである。Y子たちは机に向かってねんど遊びをしていた。Y子の隣にはボランティアのS、向い側には男の子とボランティアのKの四人がすわっていた。他にも何人かがプレー・ルームの中にいたのだが、この四人が一かたまりになっていた。

「Y子はねんどのふたをあける。小さなひも状のねんどをつまみ出す。もう一つ出す。次に板の上に箱ごとさかさにして全部を一度に出そうとする。ねんどは箱の底について外に出ない。Sがねんどを出す。Y子、大きな塊はどけてしまう。五、六センチほどのひも状の一つも両手にはさんでコロコロとすり合わせる。そのねんどもを板の上におき左手だけで前後にころがす。」

「Sがおだんごを二つ作って重ね、〴〵だるまさん、だるまさん」という。Y子に見せる。受け取ってばらばらにする。おだんごの一つをとって両手にはさみコロコロこすり合わせる。」

「向い側のKが男の子のために、蛇を作ってみせ、ひも状のねんどもをドーナツツ状の輪にする、次にKがそのドーナツツの一つをとりあげ、穴からのぞく、そのようすをY子も見えており視線が合う。……見えた、見えた、Yチャンが見えた……歌うようにいう。隣のSは虫めがねのような形を作り、これを顔の前にもって行き……鏡よ、鏡よ、鏡さん、そつと会わせて下さいな、みんなに合わせて下さいな……誰にいうでもなくロンパールームのまねをする。Y子はひも状のねんどもをドーナツツ形にしようとするが、U字形の両端が接したような形になる。それを自分の目のあたりにおしあて、両目をつぶる。」

（顔をクシャクシャに動かし口をゆがめたりして目をつぶる。大人たちのように片目だけをつぶろうとしているらしい）

「Sがおだんごを六つ作り、お皿も作って上にのせ、Y子に示し……おリングよ……Y子お皿ごと自分の前にひきよせ、一つをつまみ口に入れるまねをする。口をモグモグ動かす。お皿のはじをもってグルグル廻しながら、ながめる。リングを全部お皿から出し、また申に入れる。この動作をくりかえしながら、時々リングを食べるまねをする。Kが……Yチャンおいしい？」と聞くと、ニコニコ笑ってうなずく、KがSに向かって……私にもおリングくださいな……とか、はい十円、

どうもありがとうございます……とかいいながら大人どうしでリングの受けわたしをしている。Y子は大人たちのようすを見ている。Sが大きなまるいねんを作りを……Yチャン、これスイカよ……Y子はきちんと両手を重ねてスイカを受取り、おじぎをする。Y子はリングの一つをたいてお皿を作り、その上にスイカをのせる。」

話はもとにもどって、十六枚の絵を描いた日のことである。絵を描きおえてからだいぶたち、一人であらふらしているY子のところへ、私はドーナッツとお皿にのせたおだんごをねんごで作って持って行った。するとY子はさっそくドーナッツの穴からのぞくまねをしていた。たまたま通りあわせたボランティアのKがY子に声をかけると、おだんごの一つを手のにせてKに渡そうとする。Kはすわりこんで受けとる。Kは床の上に正座しておじぎをしたり、おだんごのやりとりが始まった。さしずめ「お客さまごっこ」というところであろう。

Y子のねんご遊びは絵のなぐり描きに相当する段階である。感覚運動的で、手のひらでコロコロところがしたり、トントンたたいたり、どのような形を作ろうという明確な目的意識があるのではないが、ねんごをいじっているうちに結果的にひも状になったり、ゆがんだ球ができ上がったりする。この例でもY

子のねんごいじりそのものには、あまり変化が見られない。しかし遊び方は変わった。この時はそばにいた二人の大人がねんごで遊んで見せた。大人たちは自分がすでに知っているねんご遊び、——つまり物の形に似せて作る、作ったもので遊ぶ、遊ぶために作る等——ねんごでどのように遊ぶのか、その一つの典型を示した。それもことあらたまつて実演したのでもなく、前もって打合わせたり、計算づくの演出でもない。二人の若いお姉さんたちがその場のふんい気度何となく……こんなことになつてしまったという感じである。別にY子に向かつて一緒にリングを作りなさいともいわなかったし、Y子はお姉さんたちほどねんごいじりをしなかった、それにもかかわらずY子はいつか、ねんごで何をしたらいいのかを自然と身につけていったといえよう。

4

ここにあげたY子の例は決して特殊なものではなく、多くの年少幼児に見られるありふれたものである。私は三つの場面をとりあつたが、それぞれに別の意味がある。例として適切であったか否かは一応不問にして、この際、私の意図を少し説明しておく。

第一の筆で絵を描いている場面は描画にともなうY子の探索行動のすがたの一つとしてとりあげた。字が読めたり、数がかぞえられたりすることと同様に、描画も「みなもと」にさかのぼっていくと、感覚運動につきあたる。しゃぶる・かじる・目で追う・さわる・ひっぱる等々。このような行動がくりかえされ発展し、やや高度になるとクレヨンをおつてみたり、手や机・床・衣服に色をぬったり、いろいろなことが試みられ確かめられている。そして時には注意深く見つめたり、ためらったり、時には自信をもって実行したりする。私は描画の第一歩として、このような発達段階を含めて考えているばかりでなく、大変重視しているので、よい例とは言えないがとりあげた。

第二と第三の例は一連のことがらを二つの場面にわけてとりあげた。私たちの社会は長い歴史の上に現在の文化を作り上げて来た。言語も音楽もまた美術も文化的な所産である。子どもたちはこうした社会の中で生活していかねばならない。それゆえ既存の社会に生活している人々、つまり親やその他の大人たちとふれあい、そこから多くのことを身につけてもらいたい。それには先ず子どもにとって最初に出会う他人——私たち保育にたずさわるもの——との心の関係がうまくいかなければならない。お互いの心がうちとけていく過程の例としてとりあげた

のが第二番目のものである。もとより、何回もの積み重ねがあってこそ、心が通じあうようになることは当然である。第三の例は顔見知りのお姉さんたちとのねんど遊びの場面であるが、Y子が大人との共通の広場に向かって自分から入っていく過程とみなして取りあげてみた。

幼児の絵を主題としながら、内容がやや唐突と思われるかもしれないが、絵画・製作といわれようが、情操教育とか治療教育と呼ばれようが、私はお互いを尊重し心のふれあいを出発点としたいと考えている。それよりむしろ描画を媒介としてわかまりのない人間関係に高めようとしているといった方がいいかもしれない。

なお、ある児童相談所での三歳五ヵ月の時のY子の判定は、ダウン症候群・知能検査測定不能・中度精神薄弱等々記載されていた。全くそのとおりであろう。しかし彼女は遅くてもマイペースでコツコツと自分の道を進みつつづけている。そしてすべての子どもがあゆんで行く道と異なったものでないことを附記しておく。

(つづく)